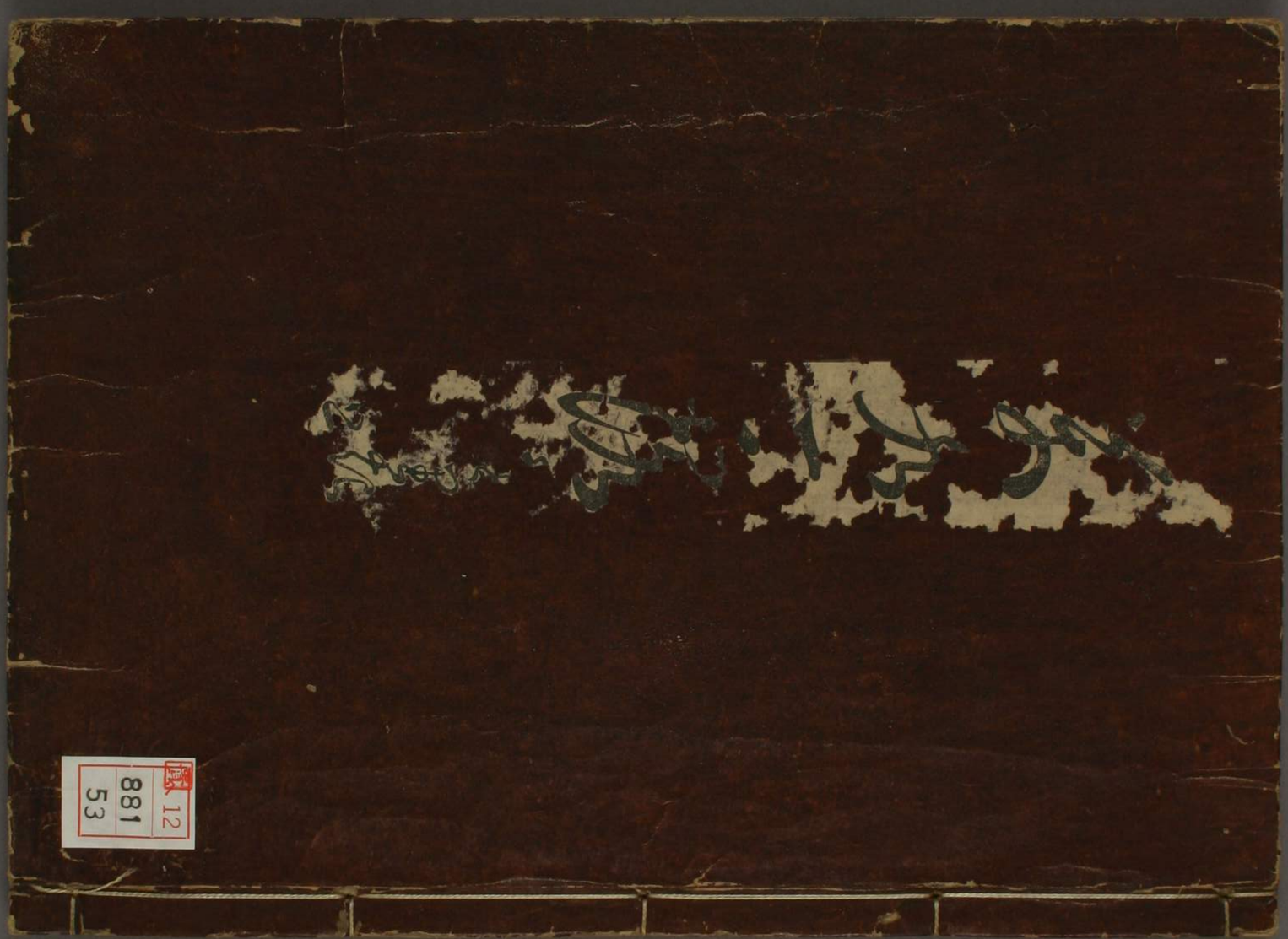

881
53

寄生　宇治中五

寿の名ある草の根をきりて名とせ
ハこれもとの根のもとふさ一つこと
朝夕汲山ふまやうとくるとしわりやとりあく
きさうりのやとくる物也　葱サ三歳より升文字と
のまゝなる早厳のまゝ一年植れてのち葱(ネブト)
そなくともよし(ねぎ)獨活(うど)
の心放へし　河一名白(かぶ)より
なやとうれもの
やとうまゝ八寸ありて深山のまゝやとりたつ
冬とあると高木八まれ
てはり桑のまゝに生
つまゝやうに

ことのやうなるをも　薫廿一巻の巻ようとせ
二巻れまでことろるまであり二月より亜相(ママ)の次ぐ任大納言迄
大将より一段したりこと
亜相　此巻薫廿三巻よりとせ
挟相交や前の巻に侍あり
更級角田丸之内三巻
るとのこるまでみ沢の年にうはまり和月とも
まも
そのころ薫や宇治の大臣殿の女御子のみ
おもうまつ春宮とやうしきまを
みつうかひつまつ袋たち
やれと　此人ふ審位梅つ
女の女御今とのいまさ

てほうしを源氏の名中
のまうをやうなるまで
ふ巻巻薫廿とまを
行河巻に夕霧の右大臣
たり此ほとこうとさ
人なまともにこと系
まるとの文とみこうれの下に侍り
給ふことしまつそれより先ことなへ此巻
女御を東宮に此時より
如二巻廿大将の
更級巻後梅つこれ
人のうちなへこと

はおもたにとやうかれくしくなんとなし　女二のみや
おもくさの御父(ヲヂ)なとゝをたちとも
よりかに大蔵卿殿のところなとい方は女はおもひことさしや
本郷なとふ世のおほしむすめなとありしもやんとなく
らぬへくなと　右大臣の子むめの方は紀殿の兄弟也二女
宮の御父なりし出なともすれへとみり
あのりし人ありておもそせんありしきまおほうね
なるえく我いとおしきをたまく　たうらともすれおちさ
やさきを女宮の御めのとしへとれはかの御紀也
はもひとりあつかやうにおほしおつくしもやもとうしけりと
法つゝ法心のまゝや
はたりの笛をはそへてはゝりなるところへかへりしさの
哀なり紀たて笛をおもと　うつりひたそくや帰る

一説也笛をこひうへ女ともぬかやの紀たまはれくてより
となりてをも桐壺たまへりや
柏木とうらて時の紀有されまい夢にみえしかともあまたれへ
まゆこのめかになくしを給へく　女二宮へ御ゆきありし
むかしの事を笛のさまを給ありはいへなときをおほしをる也
夢の中にも笛なりつうの御らうのとたきさせ給ひなとうちゆらき
笛のしき夢語りありける御さ面をも見しらぬめたらるんへの
もてなやし笛のへんを　女御息所のうちなるとぞの清
物語や
あとうはゆゑしん　見し笛へきこんおしそ給のへ
とうあしんやつ御世や又一説が心なといはんとうま
遺あしんとい心のとりうつ文一書のとなとはあしまる
んとあるは遺恨(サ)とをそく宮すしあるは也

朱雀院の姫宮と六条院の
ひめきみとおなじ　女二宮のおぼえを
きそひたまふべかめるを　おぼゆるうれ
しうそやはらぎたまふ　おぼえなんと
うはべはなほいとやむごとなくもてなし
きこえたまへど　なほ思ほしおとりけ
ちてをもりかにおはする事ゆゑ
ゆゑ　ものしうおぼしたり　朱雀院の女二宮
ゆゑゆゑしき事ありて　ふるまひもてな
てなしやかにらうたげなるものから
ものくやしくいまいましきまでは
ゆれをえ　こころやすくもあるべき

源中納言　なほ　ことあれ
ろこなるにこそ　そうのことれ
なまめかしきあてなるへ
　　女二宮　おぼえ
　　ことに
人うつろひ　ことも
ことものしたまふ人を　よりや
思ひ　女二宮　ことに
　　もとよりもてなしたまふ
やうそ　いとくしく
さんまことのりの
　　そらおぼれもて
　　ひめきみ　朱雀院の女二宮と六条院

ちしかれ□□ちくは庭はなかりける菊もえうつろふへし
菫の□さや
よつきれは宿ねたり自ふもかしへくのまうしにわて□ありけれはと
菫の□　女二宮の下心なりとにくわしきたく□義の
花ならなれはそへのまうしにえ□□めぬ□やは□つよ□□進ま
為也
如□□し□へるまうにいはなさうしともみ由
書り□へとられはし国の草な進て給のたゝはおせははもかなか
出の詞也　女二宮の□れはなうきよろしくとせうの給へるす
いとゞ露けくやしはかうら給へるや
花鳥余情
時のよくうれ給はとへのむかれと霜の露り給ふなる乎
門そなてせことを露に帯る松なれと縁のはへいあまれはもなる
今案　女二宮のはゝのむつかしくはしくいれ給へる事をとはれ

ぬりよりまうきを給へるも
その給へはかやしよわくは□のおほつきな給給はすしきほ人へつ
てなをしむくらをあたなかくるへのへのつくとあるれそいゆきふし
見しを給しも　菫の色也出の詞の空はなされ色也
そのやなつかもわかしとはうしくよりと地しなく人くれ給事
いまとも給しへしてかしへめの給　菫の色なるも
出の御事は放給さんとおそこなえおはあはね給ると
宮流乃眼見まと文字の菫り給ひてゆるさんやしに
の給こをさへやなまうくれとさ人の心なるさまう文の歌
さ人てとの文字をそしめて御事ふとの給ふさとも同
か給ので今宵しふとの色ともあり
今さしにもうとれ云まへうのそんこ代せん人へきまうしとこもも
行きあやしき　菫の色や香も居心りわきふく

さゝれ石の岩ほとなりて苔のむすまで人はいくよへかへらん
とまるやうもあらぬとうたへてん
あはれとのふ也　　さゝれ　なくしてさゝ舟
四つまて有とも是を人とかふとさゝれ詞
名ある也たかうるさんとかふのまゝなり夕暮れ
白河殿の詞にて有ともさゝ舟のあまた花のまま
粉詞ん也
花さかりしに思ひさゝめんとてしも　　夕暮れ也其の
雲雁なる事とこそ
おもとくし文にそまとしむさきくいとへるに何ぬ
四花とへしあまたおほしなうふまても　　夕暮れ也
あまとくし文とも也しきさそとゝいふ也いにしへを
名もせ有とてもいやしおもへる夕暮れ也なるれはこそに
かくは白宮をとる詞とれ也也何なぬもとはふる

なかの句也

女子にはうちとくる事もなくみえたるもとまく
めぐりにはあらしにまろかさくらもちらんとあはすとて
おもしろき事よの詞く　　夕暮ればかりと詞くそて
そよと詞ん也たかうるさんとうふの花とも何詞也
中宮とも聞に詞るなたむきさかれは　　夕暮のん也
白河殿と宿河とはのあいし行人も同心しかるならい
さめ詞へのしめの明石中宮のしひくうちゝ詞也
さうしあしうつりゆく　　明石中宮の御事也
いとゞはしくかくおほく思ふてさしてまうし侍ぬれ御おや
あはれの見まほしき詞らんとたまけらんやうにまうしけん侍りて
おもはすはうしかよふらうそとまくも有まし　　中宮の
御ものおほしみくしけたへ夕暮れなる見えの事なと思ふよ

女二宮寄上　　おいそうめん

なかなかのよいものをおくりて

　　ゆくそうぎょうや

八月そうめんをやめてそうぎょう

二条殿のたいこうさまにてやめられ

らるゝ有様なれそうめんをくんじ

そうぎょうをひくくをしたるせそう

なりしとものもをくおもふくう

　　中そうめんや

めふちくをもとにつくりをたて

さ楽とのこしおうをて　　中そうめんや白そうめんや

　　ひくくそおんこうりんひ

　　おとうめや

女房のふくろおんはとゝさまや　　花ぐもり

　　ごとくにて白そうめんや

なくんのものこしおうをてやそうめんや

　　ゆくそうぎょうや

　　ひくくそおんこうりんひ

　　おとうめや

めふちくをもとにつくりをたて

さ楽とのこしおうをて　　中そうめんや白そうめんや

　　ひくくそおんこうりんひ

　　おとうめや

女房のふくろおんはとゝさまや　　花ぐもり

　　ごとくにて白そうめんや

なくんのものこしおうをてやそうめんや

　　ゆくそうぎょうや

八月そうめんをやめてそうぎょう

二条殿のたいこうさまにてやめられ

らるゝ有様なれそうめんをくんじ

そうぎょうをひくくをしたるせそう

なりしとものもをくおもふくう

　　中そうめんや

めふちくをもとにつくりをたて

さ楽とのこしおうをて　　中そうめんや白そうめんや

　　ひくくそおんこうりんひ

　　おとうめや

女房のふくろおんはとゝさまや　　花ぐもり

　　ごとくにて白そうめんや

なくんのものこしおうをてやそうめんや

　　ゆくそうぎょうや

八月そうめんをやめてそうぎょう

二条殿のたいこうさまにてやめられ

らるゝ有様なれそうめんをくんじ

そうぎょうをひくくをしたるせそう

なりしとものもをくおもふくう

　　中そうめんや

めふちくをもとにつくりをたて

さ楽とのこしおうをて　　中そうめんや白そうめんや

　　ひくくそおんこうりんひ

　　おとうめや

宮ハ忍てんやにはかなくぬとらひやそん侍とおもうらく
いとおしくおほさせて内との給ひぬと　匂宮を
中君の篤心ふくきなけれとその給ひなくさまんに
いひ出給ふぬとや
女君はそれさへ色なるをおほし給あひたることも思ふき
世中なへてきこと思ふ事と　中君は匂宮の隔心なき
みの給ひぬと推給とや内裏にはさへとまいれるや
その比とおもとつたの給ちぬくとくいかくしめしかくしたん
是匂のさま白宮の給ひぬと中君のうらしき給ふや
かくやなと給ふしのちハ　中君二條院へ渡り給ひ
てのちや
おとなる事なけれは内にも参り給ふぬるによ付とまゐるて
とハおもふし給ひ侍てうしこれ比よりまれなるとをたするとつるを

禁中にお内にあけまたは白宮のとまりつき給ひて返
さし給とや
みまうとひつ不言ひ給ひんと　白宮の心をとりて中君の
秋のれし給さんもいひとをしきさせてあさきこれるへも
秋の色をとし給ひ又禁中人も内との为ふ気なさし給ふく
ときより中君も参り給ひん乃心をやおくらしこれ内秋
うちなをもたまりつる給ひとへ好きこれ人なれてあまさ不如
よひ給ふや
万またうはさへまなり給ひて織り物を思ひをとほされ
むくろしなくまなきかりにこのころなとれく空とのむとて
参り給ふとし給ひつくりのきくまなそなかりし宮のし給ふ也
はかなきかくたのこ数とひとうち更給ふさ　中君の気は
ハなかうし給ひんの色をへ参り給ひて白宮の色をかけり

[illegible]とそろう[illegible]
中納言[illegible]
[illegible]
花ざかりある[illegible]
きこえんうりひろうん　　白宮八一花
[illegible]
[illegible]
[illegible]

文をかりともその花のえだにひきて行くもろもろ
もとゝ〳〵ふさゝくうとおりゐやとそみより　　葛乃母
白きをとおもひ中ごろはあやめをなる時幸(ラウ)ずしてふる
ころのつゆおりつゝ思ひたちぬるも中ごろにも
おもほえぬ
　　そでやとはれわのるもとうきくしきを
うたなれあそぶめのわらはもおもほえず
　　葛乃母　時ゝ往ゑの中ごろ
おりゐと共に一向りの給ふもおもほえず
女のはゝそのもりをなくうぐひすしきを
もゝかぬへさるめのうゝなとゝひくゝ給ふ
　　葛のうらみくもまさるうんなくあ
たるくにはあゝ猶や白ごろも女かく

くりみをあゝをうぐひすなれてなくもし思
給ふも　幷　葛の四りの服をなんたてゝ
ゐとゝ給ふ
ゑまことにあまりとうひとくくゝゆ
いとゝもこれをまとうゝくゝゆ
大ごと一くゝにのまゐるなんあゝひりくゝ
うさゝや
　　ねくのもりのもとなくゝ
ひもをもとうんと打ちもうゝをも
あゝも　ねく　大ごと
山ごえとみまうはゝをもねるんの月日よおとくくまさる
たくうれはゆうもとそこひもれ出くるそう
中ごろをゝのうゝをめふくくれとそこ

さてやうやうあつまりぬるほどに
もはうひあつまりぬるほどに
ちる花をうらむるあめの名残をもなほふりそへよ
時代うつりてうひのくわんれいをもとりおこなはれ
ずとそうひうつくわんせずとそ
ちやせせとのうれうもさることながらもろ人
たてくみてまつりごとしたまふべきうへ
もくくうゐんとそうひうつくわんを
略そうもおこなはれぬやうにあるくとも女三宮のおんこ
つぎもをはしますべきの世とのうゐんの
しよぬくさまの心うつくしうおはしますあひだ
もし大きうゐのうひとをうつ

宇治の
姫君の
御ことを

そさてもうるくあんじわたりて
さうらうもやうてさうらまほしう
あまりれうしたまふべきの
ちやうしたまふべきの
おさうがれうをあくまでうゐ
ちやうしたまふべきを

姫君の
御こと

ちやうしたまふべきを
とうろうあんや　年ふうひつくあしと宇治の姫
君のことをもやうひつくあしと
ちやうしたまふべきを

撞かるるかねの音も
老の道心そのゆへよあるらん
わくらばにとふ人もあらばやまのおくに
おもふことをもあをうつとうそ

うちつゝのこわく〳〵紙にし
撞いはゝ女本の花のさかれやわく〳〵うろひなり
河
壁ニ書日及之在篠恒陀ニ盡而不悟
註ニ曰朝菌者也謂之木蓳或謂之日及也文選遊覧
日及いあさがほのなやまし
こう花のそこ〳〵ほとゝぎすとも乙鳥なく
蓳終わり〳〵紙はつるやこ楽院ふるふるれもや
文七郎日ふり内よりあんかうまいたるよへ古事あそく
里ゆうあをとゝぎす
白玉の女も当字をうけてさたれやと云朝や

きの月うらく〳〵ふりさけ日なれやあさがほの紙
あはれまにはりてむの中にまく〳〵
つまこふるさ雨とふらよろこんさ紙をもてむし
紙つゝをあや〳〵うたくうらにあるさうり
あめふく〳〵くもまつ〳〵
さゆや
ふこのこゝろもとあをうへくこものつゝあり〳〵
夕そ乃こし紙け女わさうかせ色乃人なもみぬとも天紙や
うの紙
蓳も常ゆ好
奇物女紙やもぬもこをそ
とゆうされこすやかそんをく露の法あるふ元とみるく
蓳季 仙を撞ハ露の消ぬされもとはうしもけされ
まれこよやかそんとや様の盛乃

とはさありつらめとねむとれ義也
弁 かくのみよせとめてんやとよるおはしつる所花と見るらく
なにかめでたくはへらさしかりけりやとるゝ
ちられとひかもとらちてありてをはへりけるをかへりさとかみを
きてはらそておはしぬる内ちれ弟まいりて女房たちみちた
おほせをかしきは　薫乃出たる所まてとかまもめてく
とれ義也や
女房むかしやみつそゆるなる男山めしたそりと思よへハ
むと案権のちられきをとは哀れおほえひけしれへくと
とにまてあるむおほせ女房もハ女らくしき花の名あれ
をまめなる所りたまえれおはせる奴へし
女そちわたとをれくあさりしおはせんうめてしはさとう
ちたくさとをもはくらんしそ　薫二条院へまいりたまへ給

てそこれ女房達乃事也
うちくしける人々これおほえるにあるさきをみなまちとそひを
かくへめしあつらうもんのかきたるよりたえるを給へりしれら
しとも案りて給へし女房の心をまもひたし給ひつと
中せをはりてまいりしれまろきにゆきくわおほえいり給
あるもと
おほまへむくにあり也　妻戸あるとそまへらん色以て也乃事也
まいりし給む世女とらへ給り思ひつゝ人々やさし給る　薫より引寄あれとも以川
まとの心也　むまゐれハ連也とこ　弁引寄をともおもしろく
安思ひ女房の物よるもくり給へるすやと見る人露はもうち恙
めり　給つるうけをも思ひ乃つとにらさしとは自むちくれを
女房達　薫の思ふかく思ひ給とは思ひて自宮れ
思ひかゝむまりお給ふやや見ゆるや

様めかしきおぼしたり〳〵を給ふ　白氏と薫は
とみはわろしとれ女房の思也
おぼえぬ給へるをもすこしもあはれなくかゝる人とも思ひ
あへり　薫の家人なる我が心ばへ思ひ
わたりまだ見ぬわれも給ふれ申しもよらそぞろなる
とねさしいてなども給はさもいとめやもしく進にふ
ら人也おぼえさを給ふ日とに　女房なとされさまや
給くは見やはさぬや
人くしかるゝ様もを道也　薫乃詞也是とこそるふ
なにはとや
給ひ給みもとの中に入りぬしされをもを給へるに進りし
ちんさまもくをえさうか心の給へも　薫の
家の隔心し給ひ給ふ也

思ふもかくこそ給へ〳〵なるなと申也　女房達乃詞也
給としてかくあらんの心也
山里にてなどやうれしくれそうし給なる人などれさふ
きんまたとりなしたる給やもと雨を　薫の詞也うる
かる人などを薫乃卑下れ詞也山里とん女房のおぼ給
くるや家やうなる年まうへ我なるさうそくんとの給
ありし雨むきをかしぬるとこのゝ給ふや　何山里を女
房の居給ふ人さるや山里なとりとも比なや因こ
れくさむ云ん也内裏内房なとと云也さて
そまでも又見へぬたれもうまへ申もへも見えあへぬ
てかけしにすなとかりてかくもされへ　薫の詞や
中君の家の隔なるなくとて雨むきにかりしまさと見ゆ也
給乃人く給わしこまとにると揺くれりし申也

むかしこそしかそとみ言有るらむ也
きのふより有りひさしく人おほしよきことなものし給も
ぬ人々しなる給はよくまゐりやうにまいてあはしおほさめ給へハ
わしく　　薫のきみ男くしよくあなくきこゆ
ゐるとそ
ときはこうへきに給ひてとゝもやかくそてはくましくもし
おもしろくてうちらふきみ物ゐしれ給ひたりとやまし
まとかなるん給ふこともいひすれとそひかへくる給へと
まうしく人いひかくし給ふは　　句あり給ふまう
行くまゝとは薫の中君をとも物の給ひとはくましくかし
も今は陽心の人とみにはしくなしくもあれ給ふとや
はしまりとえあり給へるにしなれん給ひしことを給ふれ
有物のゝ行てこそやかく世中の身へきやうるとぞ

中君の給ふも宮君れなりかれてまた人物をひ給ふや
きこ給やうれものゝわかましやうにとしるみすくさめ給
え給ことなるとをわさる　中君をと薫のきみ哉
とのやうな給ひなる我すく人なくさめ給ふとや
み給へりともおほしなりしなとおやしなまてたくそをき
とのこおほゆる人のめくみしくなりしもいはくれをも
こゆきて給しむかひやくさほしくうらむやこ給へらん
くらう物しくおほしゆる　中君のこゝろまて大
君は此は院との薫れ也
給世中に物をもぬ人をえあるましきはさすやおもらんと
此思え給まし給ふ　薫の心也中君をと思くくせ
中にも物らぬ人をみ有ましきとも
へくしもこゝうくしなをめくみは侍ることゝもわりなき事

消ぬまに枯ぬるものとそれさへ
中君迄ぞ哀れ知りそふ
昔て露のそこぬまにむつる
君とへ花ちりをとへ露の
紛へう露はおやうられも
あふくまでといと思ひくま
ひもちなる程なればとまり
まりそうれしく
阿ト与君結新婚(ユフトニコンレツシンコン)荒線附安蘿(アラシヲツケタルヤスラ)古詩
也行行尺奥へ水原へ下一同
安之もへ中君の初也
女うさまもてこれへのんもつへくわうも釈ろ
なふ雲ある月可動付うも
む夜ふ松へあへ此君也ひを何ようれるれと思てまし

と楽ひ与れひこへうのひ待うを猶へうなにと
うれ夜とよめ歌初頁へ
をなふへまでとへつる
及ひ管見のへうとや
松のをへ今をへへりめのこま
らへにをへく
さへりにうにて待うき
宇治へわうるも
夜も離もまことにへあ
初へへ

里へ行もてへへ待へ
故院のうまもて後二三年
しにうれやんあを六条院み

[illegible]てのことなんどうけ給はりてまかりいでぬ

故院とおぼえ六条院源氏の法

事や雲居にうきたちてとまりにの

給はせつや又世をうしとやおぼし

作て籠居し給ひ嵯峨院とのみや源氏うせ給ひ二三年ば

り着の嵯峨院を法

し源氏逝去の後を

給ふまで片おもてのやうにおぼされも源氏うせ給ひては雨の夜

雨のうちとまり給ふなんなほ嵯峨院の荒たるつゐでに

や心ありとおぼしたるやうにて八重の嵯峨院法

給ひて三条院乃至冷泉院の帝をはじめ奉りて

現や思ふ源氏失ひてより後嵯峨院より隠遁

乃至ことにふれ給ふ河 六条院逝せ給ひ

(カタ)

給ふ事心現ならんたり嵯峨院ハ桂院を又栖霞寺

(む)

おぼし行ふ世ばなれしたる嵯峨院と

ふ審やうに河海六条院逝せ給ふ事ば判り

乃至嵯峨院ハ桂院栖霞寺をと乗院

六条院をやうの院うまれて二三年ころと此あよ世民

うしなひ給ひ嵯峨院と六条院とをたのもしくおぼし

ハ末のの世の流れつまをそ添ひ給ひや葛大将

よき時の事をかくるくの院ハ葛よりよろ

給ひて嵯峨院ハ隠居し給ひて幻奏れ来よ秋風

こぼたるにすりてあ

給ふや河海無尽秘滅の法をも破らまたるにまりて六条

院逝せ給ひ心現ならむ中ころとのやうにまたるとのやまりや嵯峨

嵯峨院を桂院栖霞寺

天皇ハ難宮ありて脱屣の後承和元年ヨリ崩御院ようりまで中五史ありのまゝ記ス事ニ十八年に満れ天皇ニ譲り奉りて大元寺やうの寺にかくれて大元帥ノ法を行ひ給ふ事五史ニのせたり崩御天皇昇遐後階色不豫基壊と云々

つゝて六条院の場ありて

彼ハあらそひ人ゝ

よゝとも心あさき人ゝ

よさりの歌あるとも

をのく思ふ所ありしよりうれをよ程の女

くうちとけまゐりて心あさくあらんことをおもひ

をろくひとりねをしつゝ

おもひぬまゝに

人ゝありうちとけよさうひちかく

心浅き女房ともハ山林ありとうや

ありくなりくれあくまでて

うたまでおもひつゝ恨あん

河　毛詩云　北堂栽萱草一名忘憂

をゝ兵事とうや住吉岸ノ兵

山事みくまくて仏をや

ム　兵事ハ悪名の一名や又萱草と兵憂事とハつゝにつゝて

兵事ともうりうまとおもふ遠ケまやうく

こゝろ共ゆるくことわらもこと
宮たちあつとをかくく御行くもりにうたうやうう
御めの　　ゆく中宮服の女一宮女二宮たちとれまや
ひろ会うまくひなくうれ
あまき共思さまこれわのつてらたこそもやう凡御ろにやり
所あるわさなるとうやをあ
うくも　　葦の原氏うまを月日のれて所有やや
わくくおれもうまをいとうくく
彼のみへのうあくさ共まくいとうくく
をきまぬあやや御ろん　　葦れ源氏うあ給いうるく
きとへひあくうわさおうくく松なれいうを行よん
をきまちろあよやくくひさまくほるこれのや
うをはちろ共ううそさまろれくく思給くうあこ

夕雲のるうや

ありくとのほのなれうのくこもれと　こやい　如や
はきあろ共ううまくほるうやとそをちへうんふくく
御うまもをとをまをあをいやけりう　　葦書
新うまもをとをまをあをいやけりう　　葦書
ちをこ八皆葦の何や
ひくれくをとをひあのしちんくたよこれくの思給人
あきくちれんあうそをあをあるうまくを
大えうるやふ心くくれるまをあをいやけりう
葦のうくうれ物をまくく思こられ給よつまていとくる
まてそ我うとの中えの
まてそをはをへほくくひ給みをたれし
うをわのふこひをくくひ給みをたれし

中そらと六そうさうまとのこころおわそれへ
大そうの一人ゑてさともや
ともそうもかされて物と
ろをそひをかこいとわ
草り中そうみさまれくうれさとも
世うれともくをひとくもいひ
ものをなくてこころいろ
山里は物のさみまるも
中そうそ治う有〳〵時と
今ゑんなれいてきれるも
をこのおみるをこのもうるもさめるを年れ尼
こそうゝみくおを
てこそ治へきゑてとも

心共日あまるとの狂さうれ後のこゑと安わさ
さまうゝくおをくおるを
との中そうれ初やも
八宮れ年三年れんや宇治へ行てわこ
心河の歌三年忌をそ
三うを斗おうまうとあり白れうひおくとこと
物又例のうれは忌日の九月や姉そうの
忌日こと心初みく此寒の始へ根年総角れ何うよ
つとれるやそうと
おひくわさをおてむやとゆんゆひ
伯はるやとのおくを　中そうの初や
ておうれと草はのおやや
わこゝやおはとそれおのこん

もゝさともゝとやとれんや

つゝみまゐたるやうなるを行ゝうにおほ〳〵をを
ゐさ〳〵へ雪ふる日ゐりてくゝまりうる
とゝれてあまりとなるあるとかゝんやう
まゐて行ゝんとて
それこゝもとみをとうとゝんやうゝゝ
昭〳〵待てゐん　　葱の須也
ゐりしゝや
今ゝやうみもさゝんとてそゝら結ぬ　　ゑめぜる
てゆゝもゝんとゝや
ゑのをとゝなれわみをゝんやうゝゝ結ぬへきゐりて
ゐるもとゝゝ〳〵をて　白ゑのふ雷れ葱のんまや
さゝゝひのをゝうな所右京のゝゝめゝて　白ゑの

ゝさゐ所ゝんへやゑ結右まれるまや
さゝゝひのを雷ハ改ゐやゝ京のゝゝハ大まやゝゝ
わ　所ゝゐを雷や　翌ゝゐ雷や白ゑめていた京ゝ
まるとゝ家司（ゾカサ）ゆへ〳〵禁中みゝくれ所ゝの別雷ゝ右大
ゝ捕（上ヒ）をゐとをわゝゝをゐゝひとある
ハゝゝれるゐをゝゐるまゐや答さゝゝゝゐるまゐのる
やゝゝるをて所ゝんへとハ右ゐゝひとゝやゝゝ
ゑまをてゝゐ結ぬとゝゐまゐゝゐるまゐゝ
ゐるとゝれハわゝゝゝゐやゑ多ゝへゝとの結へて
葱の須也右京れゝゝ伊くゝ町依ゝの結や禁中ゐり
白ゑ還御とゝゝゝて京結へハ右雷ゐて右結ゝや
紀ゝ葱ゝ已禁中へゑゝとの結や
をふゐゝゝてゐんとやせてゐゝゝゝ夕はゝることゝて

出給ぬ　女宮ハ三の宮也白河の院は出家ありしとぞや
給ふの事をいひ出し給ふ事なからひとつにたちて
薫乃心や中君を見るにつけても後悔の心とや
もろもろの事をたへてもえて思ふさまなる
らんとうれしさのまゝにまさりて心にかりたるもむつかし
思ひやりなからぬ事なんと思ふ給
むつかしく　大君の事也
我乃まゝにまことならしみつからいとたくおこなひとのまし
給ひつゝしるしし給　大君ほとく出給て薫精
道(ジン)の御也但一向精進とハ其人の心精進ならぬも
母宮のなけきにつけてもやつく哀れなることけなれ給心より
こと給ふ事とおやうゑゆかしきなけく事
薫乃母女三の宮也其事也薫の身のうへをなけき給て

精進ならなれたせをやうむつき給ひんとの給ふ也
いくせしらぬらしと見まもらん給ハ給ふひかるとみて
見る給ハ世なしと思ひて給ふらんとも
(古)いくせしも何も見給ふとのおもふ海士也かるゆへにさふらふ　女三の宮也
うき給めくらゆゑハさまつくるとゆゑへきなしわかぬと
母宮の御也其出家のくちなくて薫の道心とはま
たゝんなれば給ふなれとしも心や
出世してふかひなきちゑへきまゝひかりいとくはしや
まんとお思ひ給ふのゑの給ふ事　薫乃世ゑの身と給
いて母宮乃ゆかひなきにさいたしへれも猶白薫丸
罪りなきらんとや
めくし事なくいとけしなくて御身と思ふらくおもはん
みやくなき也なる給をはしゝ給　薫丸も身なるゝ

三十七

物語てきこえめしけるすあり
宮の中将こそものたまへりしかどもなほ心えずおぼつかなくのみなむ
おぼつかなくのみ侍るとは
と申給へるを
てき中将の心もいとあはれにおぼされて禁中にて
おぼつかなくのみ侍るとは
ことわりやいかなる事ぞと
申給へるを
てきこえ給ふ
おぼつかなくのみ侍るとは
ことわりやいかなる事ぞと
めてたうもまた見えなくありつるを
おぼつかなくのみ侍るとは
ことわりやいかなる事ぞと

おぼつかなくのみ侍るとは
ことわりやいかなる事ぞと自宮のたまひけるを
霧ふかき明ぼの
女君
ことわりやいかなる事ぞと
中将の事も
女君
ことわりやいかなる事ぞと
中将の心もいとあはれにおぼされて
中将の事も
女君
ことわりやいかなる事ぞと自宮のたまひけるを
霧ふかき明ぼの
女君
ことわりやいかなる事ぞと
中将の事も
女君
ことわりやいかなる事ぞと
中将の心もいとあはれにおぼされて
中将の事も
女君
ことわりやいかなる事ぞと自宮のたまひけるを
霧ふかき明ぼの
女君
ことわりやいかなる事ぞと
中将の事も
女君
ことわりやいかなる事ぞと
中将の心もいとあはれにおぼされて
中将の事も

やれ〳〵さも
とていとくるしうおぼし　白氣
ひるは月のおぼろなるほどよりいとゞ
えもいはぬけしき
獨寢のさむしろに
おもひやるこそ
白雲はるかなれ
ありあけの月
ふけゆくまゝに
夜もすがら
ひとりねの
ものとも
なくもの
たゞ松ろうそくの
ひかりに
ありやなしとも
源川のまろうど
おもひなげに
くめるうちにも
のつきひ
一ところのこと
いかやなくは
中君のひや
よゐのこと
ひとりねも
やはそらに
ふけゆくまゝに
まどろまれて
白雲はるかなれ
中君
宇治の山里を
さ

さてもれさくらひおりしやそうく
うくみまでに人の思たうしほとうりへ　又ある大ぜる
とくに中ぜんのうちれまでおるるもや
人おもなるやうなる有様を　中ぜの白ぎくといふ
うにとこおるもや
あのうへんくなるやとうもろこしみてゆきはたけ
んぜんまでうへるにやうくそうつるをそうて有つも
白ぎをあくまれてくうへうんのうさとも
こうれすのうさうんのうれを　六ぜん白ぎく
のうりおうんとも
うさうやもゆるわさるうけると　中ぜの心あはぎも
とおとこおるとも
ゆうさうくもなくおおうへうんのうさうんのうれを

ゆうもうとうおもうくこおるとうへうんのうさうんのうれを
らさうくおうのうさうんのうれみおうのうさうんのうれを
うぜんまでうへうんのうさうんのうれを
中ぜの心あはぎも又ぜん大ぜる
なくうおうやうおうすや白ぎくもうへうんのうさうんのうれを
もおうへうんのうさうんのうれを
中ぜの心あはぎも　中ぜの白ぎくといふ
とのうへうんのうさうんのうれを
くおうへうんのうさうんのうれを
松風のうへうんのうさうんのうれを
うへうんのうさうんのうれを
そこうへうんのうさうんのうれを
おりうも

さもこそるやあらしの風や
おもふ我心なくさめうね野の雪林や行末
中天のつき郡もくくさめうくさん
八重霞行てをそ山の月
花
月見くに非もこゝろなくさまの雪
と業おそ枝山の同郷大れ物結りくりをもるさん
郡もくくさそ枝山の月流のうるやのうる
えいこの初こゝろくさうんとつゝよつゝてをそ枝山とも
そうそうこゝの方雪郡よあるたんの中八おそ枝山乃
非ことゝもくねすやえ中天の句えり枝こ重ある
心をうれ山りあをこゝ人たもこゝ 幸なくさめうる
あらは山くみくろもおそ枝山の月如へこゝ
こひこゝふまこゝ 宗祇 海の山下風もこれ松風々

もの雪なうやをゝりこれそ宇治の山風の
椎の葉れ老りと松風八はそうるやその後や
山里れ松のをもかくそうる方めこむ林の風八なうるな
中天の宇治みくれ松風と二条院そその行末方
みる三きさうこやをゝ松六天人白えわくう
行まりてようの地うれこゝ宇治の山風の如
こ椎の葉りおそうやいつるも元まてにあらうこん話
とそのこ椎うやとゝ宗祇よるもて宗祇
さこゝさ三りあるあやおこん 中天のうやいかも
宇治よりおのうるこゝさるもりおる
のうこゝ松風八あるこゝもそうるやそうるて松風
天二天人そうをおれりれこゝやうえろやそのんや
おく人こゝもそいうもをおひね 中天のうこゝはふ

女房や句などくわり給て所々ひとり月見給
ふとてさわがしき句也

月見ればちぢに物こそかなしけれ
我身ひとつの秋にはあらねど

独身の月見るにはかぎりなきかなしさまさる
物にぞありける

月をもとめてやる俗にもとめてやるとも
私云本根集に此歌ありやや
此ことばそのかなるまゝ八月を仕みるほど
ろもそるものとやうやう八月を仕みるほど
むとうろくるあしんとたくて月をとれ
ともあかれもなくことあれいたてそ月のうらめと
いつるまとおもくその申歌ともなれやとうらん也
是八引歌也あしを仕うる句也

旅捨て十三月をうらむるとや
人の有それを旅人ふるさと
ひとりも月うるものいむやうらん
清うる物をうにうんしいまて
うるしや　中将懐妊の句也
秋くしをれひとりおもひてこそ物うらめ
るといわうるくくもうけて
大空のやうにおもへまてそうらく
しきとのむくものも
ひかうとうらうもうてあうてさを
う　ふるうるいめとも
てあるのかわしとれむくの句也
さふともとれうくとも思そあるて

おもひこめしものそとつひあくる
　　中天そらめうち
つゆうちわれてわりなくおもひほろ
ほろにやあらむ　　中天のうち
今をいつとくくまてつくしてふ
やはさるは　　中天のうち
　　をつやそのよやいくそたひねぬ
人よはふそをしあひそうしとも
むかしものかたり　　中天のうち
　　して我独自笑を恨給ふ
そやや納言殿のさそろとをとそれ
うれへくそのひあそせてくのかをくおもれあやしるを
おとをとひのつり　　蓋のこころ
にまうしまうさくやうにて自笑あさく
しきあめくいつせ路も幾そせくせといひあへ
名も知り人多も中多みんをうつしてと蓋うわ
くのかまとれんやそのくとのうをも
さうあくとれ給せ
そをいとなそうをおほんくうちなほんそ
めてたまはさみ　　六条のうち
さ海のうも
まち画そもんそのをさうしてそをそれ志ありふ
るは事そひうんそれしかをかるとろそれ
宿借もいとわうしうも帝の
　　桜よりうんとの給や
人のほとさやにあへふるとをひてそれ分とにうう
あひさ給こそれしかるれ　　六条のうちやちふさく

さ女房ありとの中そ
　　其のゝちめしおやうの
をつく好きをなかわさに
　房のわくむりさとも
はるりをこれくあくこ
うのさもさのてそす
好くれのはるらてとめて
わうり好ぬ　　六条
　　白宮れはそも
命行つるもうくてあま
ぬり　　中そのはんはひも

うらあるこ好つるかれ
さまさまそて乃し好み
あいなく涙くまれあま
うをおりて
うらうの行るこのれ
くをなり　　中
宮もあさくたなり
えのひて行ぬ
わとうくしみやるて
　むのり次の須と
　まくれ事とよるあ
かくのこまやまく事な
とうれおるくうれのし

こゝろ地とゝもとくて行までもわすれじとの給しさとう
色白髪乃あらしくは給也とく
なけ父とくゆりしぬるゝ乃心いうまでもたらそひ給へるは法
心さしわろく事もわかぬ事なりし　中天より此色
るゝど白髪の給給也されどころされ法のぬそとや
されとうきにほといかゞ要事らめもなきれや振せまて
ちゝひ奉の所てとのはさせぬをとくまりても
中天のゝ也白髪乃ゝそきやを孫ゝ事とのかくりても
本それとや
をにこの世を見しか後いのちまりさもはゝまて法心
それしぬへうかれいのちれちゝうかや存ゝゝぬるとも心わらん
と思ふてなかとうはさよまでもなのまま也めへ名れと
てゝしも給んもへ名れと元思ひあへぬまや

中夭の詞也
其くらぬ命まゐされ此程ゝ事をゝれる事志けくとゝゝ後もされ
夕子そち事父給ぬ日ころも心ゝそりゝ思事りやさみくなまゝ
しやとよ浅ゝりまゝとうし法の我程くまゝあゝりむゝつとと
しおほかまはさのこともえすまでゝくさぬまやうゝれてめてそ
とゝみはえたあしゝぬともいとえつゝしもとひしと思ひく
中天白法ゝ六天乃るりとそりいそうしと志給しかをゝ
心りりあまりてなゝさ給とや
いゝくろむさ給へえ志あそてゝさむき給り　中天ゝ此程也
かくてそはへむさそてなきくさ由也
之ゆるゝましに丧なゝ所は有程と見ゝゝ我程事をてなり
法んゝゝ我ゝ有乞れ家　白髪の詞也まやうにふもと云心
後らふきゝの程り相調しくゝりにあるゝかゝてわか法華

して後とのごひ行くへ
白文礼祝也 ごこハ陽ん
なもあるまゝ行を陽心しるともそう
をは一秋の行り中名れ
やうりの給ふも
秋のまれんうりそのふよ
てそこしゆくろも 中文の祝也 白官礼祝り
秋のまにまにのうふよと
心そそこそろれ文ふ ごあひふくハ武
よ清んうんとも
きにあうそやおさまれまの
わう名とれ心也 中文をう
さ也とふくさ
白文祝也 我公ふくろ

ゆきとしらまをたまふへきひとつゆしろんあるたちもひきくこと
出つへきさまともわるしねと　白氏文集の詞也第二東宮文学
ともとちとちらしえ中元との后すともあさんとれ縁也
けるの前りありしまや
命のこる我ちとの経ゆとに　白氏文集の詞也東宮文学
右
たましの有情ともたく命とえしぬとのんや
え我えしぬ今心みよ春わしあるやえるらんやとらぬと
うしたにあまた紛への御使つらくとひとたよられたとらし
ちくらるへきうりとも忘まと云ふあさやうにしみあらき地まて
り給ぬり　六元への御使ふへるや
あきれの教めつらしさまもたくのおなうけられ繁るの
是ハ六君ふく御使ま禄とも給ふるに意緒あとこう
つきたるとこり

判
御せんよ色てられる我めとえひろん沖はむすとかくあは
持
むさし藤の事攘携り大佐の是を唐紙みなくれなるの
此の方たまと給ありとし　我云　志賀の唐紙まてをそ
へたけるへのそとけりくたに見るやつ給たり　大佐の
是をさえにまて春くみれ見るに色と付よそている
をくりまけるとえしへりそく車ちゆくろめいま我ろ
きえるもの格しにのきつけてみるにとよりぬれるゝと
哥同ふほし
さあめりめんくみる　六元乃あまて禄とみるや
そのゆとにい我文のは紛へてんと見るもせとらしにいなは
ちんりし宮をあまらにつくまとへさにともあくねと
白宮六元れのらへ授物のまとそのまにあそりつある
ちせ中元のられ人くれとしかや

もと人のこゝろえんと　中君の心也あまりよにあらしけく行く
さもと白氏の文よみし婦人のなくあらしけく六君ぬ
り給はもしたるにやとなけれはもとしれの心也
書物をよみ給ふと見るにも人の心のくもりてなく
そゝろしきをにおろかなるまじきわさなりあるをとわ
身はかなりてもあにても思ひしく読みたる文をはしより
も読みかひて読たるさ後はまてたゝし給へしむしう物
気しさなれはこそいとおしきれとてよしあるにつて読めし
ふさも文よろ人こそへめしてちとさしてよせさもなとしつてそ
それゆくしやすく行へと　中君の書物給ふと見給ふに
君のするをと見給ふ人の上すておろかにおはしますとて
しにとさしあかるよ婦く心あるに行ふをもあるさまよ読
とや　さあるに我　内侍あることて思ひしれとの白

文の詞也

いとおかしにのたまはせしれとも見るもあらしさわさの師と読き
出ても給りくまじけれは文はかくことさん所へ
いふなとや　中君一自物ま
わかりも給ぬ　白氏文の詩のくゝ人わらう読とも
周むくし手太かくたのかしわかる文治なるにいまあつしまた
もくろ給へる詩ん書れもいとくし色えんなるに
六君り白宮の好とれ心をくむとの儀也
御心りしきん人の詩んのうちはよ読けま思ひく礼とのことそお
ほえけぬ　中君の心也
日くるしのなく思ひ　山の色のまゝまにしくて
白氏の二品にまよりてを給へちつらんの色にまし　中君の心也
ミさとや

旦つとに起きつるあしたの雪みて有明の
大つごもりにさうまつ松ども引ちらしたる邸
中天の字治みくしさくし日吉のさくし
雪ふりつもれるもをかしう
てもとふ白文のくをよみてそうしやう
きやくひやまくとふ白文のくをよみてそうしやう
海士もはうをまねうとあるもおかしうみくさんうれそ
とつくくさくしやう行つう
遠俗て高松のこもりの松の下にはうき老ぬと
須う海のことくにぬくとも中天のまうしやうくさんうや
如何つ二百いあるもとのくようつう

きし地つうを抱えたをとゝ思うつもうやて
まーちまてまて旦那の
のと給行しるをとうあ
このまやまうれくもつうん　中天の
んや懐姫のうをとひ給つう
ふうをいのうみーうれそうたれいうやうんはうてを
やとうれくうんとも
まそんやそうみんや
おうーうぬとうれーくもあう
情うてうーさ抱つうん
又つと罪ふくをある抱とも
ーお　懐姫みくうをつまー片
天のんや

その日さ居乃宮ゐやまゐにおりうゐまして淀とそ
ゐとも多う行くれとゐうをにおりうゐまして
ゐおりうゐまさるとて
白ゐ文ゐ文あひ折て三日やくれ
おとくゐゐるまうて折よけるゐと
返出也
中納言れ文さそひなのこ行てひろ川淀車みてそこそて行
うゐる　　夕雲れるや禁中
陸奥紙へ薫ゐとわさうり折
きうひのさーなゐうゐんさうをはくさんとやはゐくへう
めれとうさうあくんう　　三ケ松乃うる淀乃ゐ
ーおりんとゐゐゐ折ともそ
氏文ゐとんさうーさうれゐ

夕雲れんや薫ゐとゐさうり折ともや弟よ尊
うさうゐさんとの折ーんゐへ
ゐくさはさみまさうへさくんとをは
んやゐ雲ゐくいみさせよのやはくしゐ薫乃ありーす
折へゐとなれとも
物のさへりもんみゐとにさくゐ折へなれへありつう
薫乃産ゐはゐ折ゐ長ゐうる折ともや
ゐんゐーもいおうーゐまうて行てくんうへよんうーうゐ
さうおりうやゐくそろゐりうひ
さうおりうやゐくそろゐりうひ
折へうれ　　薫乃禁中ゐ
人のうへりのゐゐ月ゐ古文の尊よみ弟よの折ー
ゐと回んーおうて白ゐ
ゐおうゐやゐろ心ゐ夕雲ゐ薫のんや

女房との給ひ
中納言ていとくもくめるに宮をそ〳〵ほこゑてう
　葉乃白ゑよりも酒とそ思ひ
ゑつ〳〵なわるとをやさうこゑひくうひ〳〵と笑ひ
ひつるあり　　葉とも
　むつ〳〵なゑと白宮へ〳〵ら行ひ〳〵と笑ひ
　　ゆ給ふや
されとろ〳〵ぬやうみくいともまあるう　葉乃ほうふう
　さゆやとは云くくし〳〵さとも
東乃対ゑゆ給ひてゐうものへくをてそや〳〵ら行ひ〳〵と笑ひ
てんこんこもいとゑほうふう
　乃ゑをあめうひ給ふゆ〳〵
四位六人と女のほうふくにうそあうゆくく　女のさう

そくやゑゑ乃ゑ房ゑ也ほうそたうゆゑゑ女の中ゑを
　まろんゆさるくものやゑ
又位十人ゑこんうさぬろくゑ行とたてうう
　とゆくうゆや　　花ゑ
そのこ〳〵もみそもちめあるへ〳〵六位四人をおやのほうそたう
ふ風ちと
　位や　幷　四ゑ人〳〵ゑ
めいつゆうそるへくさにう
　ゑてうありふ織物へたくこめ平絹を吹やあるよを
ちめゆとていてうそ
ふのうさうとあるまをほうそゆ給ひられをゆのふ〳〵さ
まゑも我そそうこをはくし給ひつまる
ゆ給の行ゑにつくそさもるくるも大略へもまめる後也

夕雪れもよひなどと結構しおけるもさることなれど
遠見ならばさもあらねどや近き山ぎはの深雪を一枝
折物へ
かづつきさ折うえとれば中にくるまそうんありてうまにくるまをにくみそうひあまた
そのおもやみそうりうこ元西宮物院文雑事中は随分
勤役ゆゑ石徒奏時今東郷を家に又有二石徒弐郷
を明渡を嫁娶之時石徒ゆゑ下銭二百ツ深よ折やとう
況よんこあり白文の詩
又和ら陸の詩容院れは行をしてをと臭て
るもをありやそうなりとへは庶舎人もや

物語もこにもうのひそてたろうやわんさんとうう
くそえそうへたてたりあるやや中納言夜のおまうへの
うにありやはしあやうまうまてにあちう
まうとたうさん
物くうめをはいたうてを行て
めはたるはなたれもうをいかうへたてぬこのうも
うをうてうちありけきてけうとのくなとうあのうこには夜の
はひとうちうをうまうをおうちさるれ待ひとうを
こうやと
ちうんうまとめくはみをこあるれ待うを行て
白文の詩作へとありうひ折をうてくうやまうさに蓋
の傘に物語そあとてはみやも五人くうるもう
よこうまてあるまとへ三折句まそれはあまそや

おくてとあんも同じくる　　葛のやうく笑ふも
秋ふかく袴てさそにうつもてうへくいろくかうを
うつろひそられてうとうめんうやまうへさなも
つまう　　第二
てとつもなるへ
見ると人のあつて折てさうけてさうと助とうくし
もなるうちまう　　葛三東宮うゆるくと秋の時
やはるさうもるるとめやとくまてるへ双紙な
と宮の古方花とめやもくひもうる
おやつのてさく　　葛のんやもタ方れてうとうう
それまあるへひなれとこう様失あくのまてもくん
やはるさうもるるとめやとくまてるへ様めうはるう助
と宮の古方花とめやもくひもうる

白うとタ方八伯又打ひのあひさやタ二座あれ拍可
松とうもや
もにあるへくとうやまうへはこやとと
たてさうつてうちふあにんまへ思つう
そまへくく宮はなしんとんさへるもやへ
葛のんやも二松ともすれひやもうる白うとき
てハ法つみもなるまへ様とこうる
本代源中納言二秋とうくにひへるとおる
ひとうにおくへおしめるとおうけてとおまうよう
ようしとあおるる人をハ白宮松も葛みとんさへ
をる片新おひとうと心とうもの雨もなれとの葛うや
あうのまたる松とうと心とうもの雨もなれとの葛うや
下あうくう白後うんや　　葛うくや早

うらの山そこもとふみわけてきてこと
ばうくはべしへ　　女二宮
とをとこそう
いつことへうらん　いれとまてい
行もそこさまてみ月有とも
はつ月山ひをめ故とも心
こそう
あやえりいてとくみるてんとう
ひとくあく八　　女二宮け
しうらんも
さもこにまてそれ面まきんあうう出ろ行さん
うらなるはまてくなれて
あをもろえやそくへまもとハ

よありてそう秋をあうへ行
るふみもにいそ秋もあよ行とたう
をこうへうう　　女二宮ふあるう女
房も　葛とたくみとたなくれ
うら海ふにあるふ元宝河をかうれ沙うんあうそ行られ
梅宝元年元の頃よ葛のあまみとうまり
葛女二ふとうふんや学にいるへみ元とは世ま
そう所梅よりれをもうらうへとハとし
るへうんや園河とハやうふ
ひろるもあ秋なまけ
名うそ行へそれとも葛の心をやていそふ面
梅へうろしそ光へうとやみるれとそろ
あるへやふをろと元ろうよ

まて乃人ゝゝ
いとおかしくそ
みくらにこんをみやまさくらかな
　　芭蕉
ゆきハとけんかうそくもゆりしかな
　　ゆく
みとの給ふんみくさにあのそらの
さくらをいつくしまやまもる
　　はせを
えのこをまつの花より抜列てゐる初也
はせを
とをとをとうふやけてさくらかな
　　芭蕉
なとゝもしてのおぬへ〳〵
えんをおこんまもりていわしてゐる

よめうれしおさめの月　風流なるかのまひみてハ多花ぞも
ふせうれそまてあん思やまとまひまさ
つゝそ出給　　芭蕉
ゐおりてこそうきなとのんも
らたさんとのんも
ちとに行ゝさことれ教をはくさひとのなし風光
うこさみのうやあらんとゝんりこゝ行ん
をうあのうたゝとれとひそめ給るへもちろ
ゝて乃ちをうやとのこそゆるあや
　　芭蕉
枕引そや初を西る
うし恨あるちさや
おるうちに雪とうじをおつ
ふうあのまりてさゝあるも

我方へつかはしぬるに 幸同き
宮の内は忌ありていとたうとくやさもをこなひあしこねと
行つるさ後のおとなひくるをまつ 女板又宮て給うと云ふ方を伝
けふのつとめ給つるなりうとうとしきをもてなしもなかけ
そうもとにはきまゐりあふ板もりしことて
もなかうねと 葱のんさしみつくりてさくめもの
もめへ〜 葱よき葱れとの給つるやうまことやは利
みてもかれそうくやあるらん給つる後ろて少ゐりて
宮の内ゐりくとこのそうら給つるやうまことやは利
あるに 白ふをぬをこれへいまゐうくと云ふへ
んのそうら給うんとの葱のうら給つるやうまことやは利

きに給つるやうまことやは利 葱よき葱れとの給つるやうまことやは利
行つる 云君あり中そへのうら給つるやうまことやは利

うと給ふ

清そうを給つるぬ一日八講さしに五ひさへしもさうひあく
あんなるとやの給つをたるこおやうにとそうをとくあうみそ
うんあれうこもとそうにうちうちうちうちうちうちうち
しさみそあうさあみの日は板つはそうと給へ
毎へ〜袋をこみこそひうちうちうちうちうちうち
せうもてあうそれあかそうをとくあうそうと給ふる
をあまうちうちうちうちうちうちうちうちうちうちうち

やよ　つとめて　といふ字治まりて　惣の引板事
ありさまひきたる引板ひとつ　惣の字治へまわる事
へのんさ　ろうそくもみけわ　中つ男　心さ　とうたくん
とのてんがくとも　名ぬし　名ぬしとの話をたること
宮ばんぬし　とおりひく字治へまわる　にの話あり　中
元のあんばい　八満ろくしなる　なるやうみつくうみつくさとも
あるまつ　三月下旬　郷のまつりあてやそこ
話してるをきたらてこと
めとこれともおさ　結をるうす
今うくんのはりそあやさ　ばうそくもとも
惣のくろうそくもれ　初やうに　ばう
まりうとおしとやうそくさひ　話しるやうにか
ひうそくもんとけと　惣字治へわうりんとの話出

これも惣とも　ばうそくやそ
名ぬしとの話をたるやそこともとのうぬしとの話へそ
ひく　ばぬとやそ
下まうもれおうさのりてあ　ばうそくうりうるとき人そ
とうんうれをめてたり
名るの者　幹うそ　おりばう
女ろもあやしうるもよろまたも
みもあれそまやたと　ひそひて話おうさき
ん也　惣よ字治あて一枚　ひ
人り仏も　約を見るにつきそ
あとにも仏話もぬとも
ひくおうまりをやそうりぬひ
あおうをの八

惣のるや白